

いはき新報

發行日 五月廿五日(三回)
福島縣石城郡平町長橋町四七
發行所 いはき新報社
編輯兼發行人 高木 喬
印刷 高木 喬
本紙定價 一月十錢 三月廿錢
廣告料 場所指定 十錢増

綿の如き雪の國へ

氣持よくゆけ辰野氏

片倉所長辰野賢造氏を送る

片倉磐城製糸株式會社所長辰野賢造氏が山形へ榮轉となり、去る十八日午前九時半驛發越線にて赴任された、近縣とは云ひながら又た平町から事業手腕家を一失ふ事となつた、筆者は極めて少數の交遊範圍ではあるが、事業手腕家關係者中氏は筆者を尊敬せしめたる第一人者である、人間としての氏事業家としての氏夫として、親としての氏の何れをつまんでも事業者中氏に比肩し得る人は一人もあるまい、一般に通用はしない、又おそれと賛成は出来ないが氏は堅く持して譲らぬ人生觀を持つてゐる氏はその奉ずる主義を決して主張しないばかりか却つて是を押し包んでゐるが併し居常事毎にその奉ずる主義に釋して行動する物柔かな外交振りより氏をくみし易しと見るは大間違ひにして寧ろ剛頑不屈完全に人をなめつくしてゐる大丈夫世渡りをし抜く苦勞人である、氏は平町に創立片倉磐城製糸株式會社所長としての初陣は昭和四年六月頃と思ふ全片倉系統注視の片倉磐城製糸業務の一戦の結果はどうだつた、快勝に快勝感嘆かしめざる働きを見せたではないか、業務の進展に努力された事務長中村吉郎氏と共に采配宜しきを得て東北に所在する同系統各製糸工場生産高率率其他の業績を統計的の競争に依つて斷然第一位を占めたそれも三年間繼續したので片倉本社より優勝旗を授與され頼る面目を施したではないか、更に家庭の人として

親切と俠義で評判の

安藤金治氏

煙草代を貯めて

貧困者に寄附す

尺八の大家、撞球は百点の高点者平町仲木炭商安藤金治氏は球を突きながら大

めぬ氏は昨年一月からブツチリと禁煙す之を貯蓄し去る十九日町役場へ貧困者救済のため木炭八十俵及び現金二十圓を寄附したが、同寄附の木炭は無料で夫々各戸へ配る由、因に同氏は無口な人で初對面者には決していゝ感じを與えないが奔馬の如き邁進性が鬱血し親切と俠義の点は半歩たりとも人後におくれる執行人ではない、熱と力と押しで行く点と果斷實行主義を地で行く人である

日に隆盛の

七十七平支店

株式會社七十七銀行平支店大正八年の設置であるが現支店長小原良武氏以下行員一同極めて懇切に客に接してゐる基礎極めて鞏固なる銀行支店なる爲め信用あり業務日と共に盛んである

新進氣鋭

千葉彦治氏

努力と熱の人、若き法學士千葉彦治氏は平町田町に法律事務所を設け民事事務を懇切に取扱つてゐる、氏は何人にも譲らざる熱烈さをもつてゐる政友系の人であるが事業上、地方開發の爲めには政黨を超越し社交上に於ても政黨の採外に起つ公平な態度を持する賢明な人である今度我大平町開發上に無くてならぬ新進氣鋭の人物である

吉例景品付初大賣出

舊正月二日、三日

二日は午前二時開店

平素の御眷顧に報ゆるため奉仕品を豊富に取揃へ景品も大奮發して年一回の御禮大提供！賑々しく御來店を御待ち申上ます

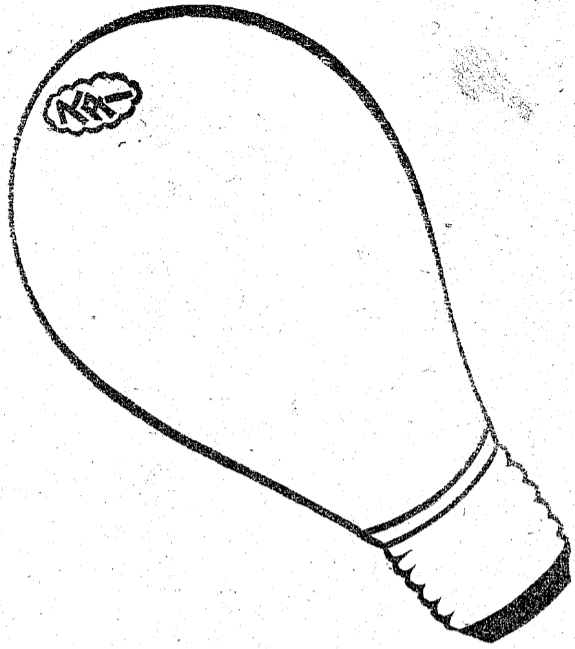
商品券

當日は込合ますから商品券の御利用を願ひます

御買初は何卒今年もふかやで

本店洋物

大谷晴計病院
電話九番



瓦斯入電球
値上せず十八錢と十二錢
五十燭まで御電話あれば迅速に御
届け致します

鹽屋の吉例大福引
舊正月 二日三日 大賣出し
朝一時 夕五時
商品乃海 景品の山
福引御買上一圓毎二一本
副景品御買上三圓以上先着順三百名様へ
醬油 味噌 鰹節 食料品
たひら正宗
商品券各種

山崎合名會社
平町 電話十番

福銘酒 美
内郷村 四家又一

舊正月三日
吉例大賣出し
景品如山
諸橋吳服店
平町新川町

内科小兒科花柳病科
藤沼醫院
入院需應
平町紺屋町
電話一〇七番

店好イ買
良信ラ安ク買
クースーリ
関内藥舖
藥劑師 関内栄助
電話四〇番

舊正月一週間
林長二郎 共演の「不如歸」
川崎弘子
を上映致しますから陸續
御來館の程御願ひします
平館主 松田卯次朗

食事と喫茶
一ツツカ
卷六四話電
淋病 皮膚病 婦人病
梅毒 腸胃病 腸虫病
門專
松村 院醫科
町南斗
〇七一話電

セメント 壁用材料
コールタール
ペンキ塗料
板ガラス
磐城セメント株式會社
代理店 西村屋藥舖
平町二丁目 電三

高久病院
院長 醫學士 高久 忠
副院長 新潟醫學士 赤羽 清
藥局長 藥劑師 佐竹 菊雄
内科小兒科 外科花柳病科
耳鼻咽喉科 レントゲン科
平町田町 電話五二三番

和洋銅鐵物問屋
鹽屋大商店
舊正月二日三日 初大賣出し
景品山の如し
目五五番
番九九番九話電